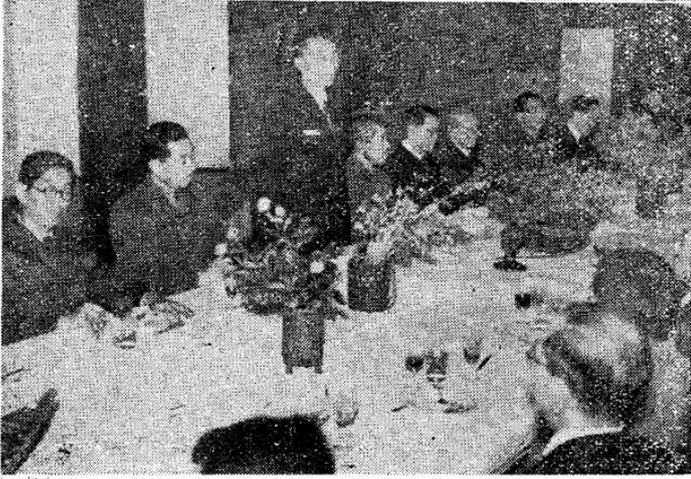




# 友邦通信代表を迎ふ

## 思想決戦に提携協力

國民政府宣傳部次長中央電訊社社長郭秀峯、同社副社長胡瀾洲のわが國新聞通信界を視察するたため五月七日着京した。兩氏は翌八日大詔奉戴日の朝、宿舎帝國ホテルより直ちに日比谷公園廣場に至り、宮城前進行進の隊列を整へた同盟郷軍分會および産報各隊の前に姿を現し、古野社長と並んでこの



號十八第  
月五年九十和昭  
行發日五十  
行發日五十・同一月定  
錢五六部一價年一  
錢十六(共稅)分年一  
覺・川藤 編人發行  
園公谷比日區町都京東  
社信通盟同 所行發  
(頁々會版出本號日)  
(八〇〇二二東東)  
(八〇一東東)

### 一行の日程は左のごとくであつた

- △中央電訊社々長一行日程
- 五月四日 福岡着、直ちに列車で東上
- 五日 名古屋着(泊)
- 六日 伊勢神宮參拜(名古屋泊)
- 七日 着京
- 八日 午前八時郷軍同盟分會同盟産報各隊の宮城前進行進に参加後、大東亞省、情報局、外務省、陸海軍兩報道部、大使館、新聞會を歴訪挨拶、同盟に於て午餐

後同盟幹部と懇談並に同盟社内視察、夜同盟招待の帝國ホテルにおける日華交誼晩餐會に臨む

九日 同盟技術研究所、學寮同盟多摩農場視察、午後は新聞社及び放送協會を訪問、夜情報局總裁招待の帝國ホテルにおける晩餐會に臨む

十日 大東亞大臣招待の同大臣官邸における午餐會に臨み、午後は市内を見學、夜新聞會招待の大東亞會館における晩餐會に臨む

十一日 午前中休養、午後箱根行(一泊)

十二日 小田原より東京へ戻り東京驛發列車で西下、歸國の途につく

【寫眞説明】 上圖はわが社における社長と一行の懇談、郭社長(中央、胡副社長(向つて左)、古野社長(右)、下圖は帝國ホテルにおけるわが社招待晩餐會にて郭社長挨拶、向つて左より村田情報局長、村山朝日社長、郭社長、古野社長、胡副社長、正力讀賣社長、竹内大東亞省總務局長、井口情報局第三部長、武藤同第二部長(以下略)

## 中央電訊社について

本社編輯局 入江啓四郎  
國府が漫都四周年を迎へた直後中央電訊社も創立四周年を迎へ、それを機會に決戦年度の通信戰指導部を最大限に強化する意味から中央社正副社長の更迭をみたのであつた。

新社長は宣傳部次長郭秀峯氏の兼任、副社長は今まで湖北省宣傳處處長であつた胡瀾洲氏で、ともに日本留學者であり、日華報道陣の運籌提攜上、正に恰好な人選である。兩氏が古野社長の招待に應じ、戰時日本の實情を注意深く見學したことは、やがて中央社の運籌上、又中國の宣傳戰上、實效を現すであらう。

中央社は機構上、同盟のやうな獨立法人ではなく、行政院宣傳部の下部組織であるが、その使命は飽くまで國家的で、決して政府一部の宣傳機關ではない。それに中國の新聞は、その九割までが宣傳部の直屬下にあるとはいふものの内容的にみると、ずいぶん貧弱であり、例へば取材方面でも殆どみな通信社に依存してゐるのであるから、中央社の役割は大きい。

一、邦人のみならず現地人職員も全部會員として参加せしめるが編隊の際には原則として少くも小隊單位をもつて邦人と現地人とを別々に組織することとした中隊長は常に邦人たることとしてゐる。小隊をもつて基礎隊とし、五名乃至十名を基準として編成すること。

廣大な南方の天地に展開、對敵思想戰々士として日夜をわかつた奮闘し、互に目的を同じくして職域奉公の誠心誠意を傾注して、力のあらん限りを盡すわれらが同僚を、がつちりと横の紐帯で大きく結ばんとする「同盟南方報」の偉大なる構想、最も現實に即した實踐への新しき活躍こそ、決戦下期して俟つべきものがある。

## 同盟南方報道報國會

### 産報の一翼として近く結成

近く南方總社管下に勤務する内地人、現地人全職員の鍊成親睦團體を結成することになつた。本團體は本社における産業報國會の南方における一翼として組織されるが、南方の特殊事情にかながみ産

業報國會の名を冠することは適當でないため報道報國會の名を選び「同盟南方報道報國會」の名稱をもつて、實質的には本社産報と密接な聯繫を保ち、飽くまで本社機構の一翼たるの實を擧げんとする

ものである。南方總社においてはもちろん、管下各支社局においても着々準備を急いでをり、近く華々しく結成される筈である。新「南方報道報國會」の組織要綱は左のごとくである。一、綱領及び規約は能ふ限り「同盟産業報國會」の綱領及び規約の内容をそのまゝ用ひ「南方報」が同盟産報の一翼たる事實に即應せしめること。二、社長を「南方報」の會長に推戴して本部の指揮統制を「南方報」におよぼすこととし、本部役員を重複して「南方報」役員に列することを避けたこと。三、各地方區隊は「南方報」の一翼なるも、總隊別にまとまつた組織の形態をとり、現地における社外關係としては當該地域の獨立した職員會としての取扱ひを受けることが出来る仕組みとしたこと。一、邦人のみならず現地人職員も全部會員として参加せしめるが編隊の際には原則として少くも小隊單位をもつて邦人と現地人とを別々に組織することとした中隊長は常に邦人たることとしてゐる。小隊をもつて基礎隊とし、五名乃至十名を基準として編成すること。



經濟局勤務社員 村上 正好  
依願解職(三月十七日附)  
熊本支局 宮崎タキ子  
山形支局 高村 葉子  
依願解職(三月二十日附各通)  
大阪支社囑託 中里 暢子  
依願解職(三月二十五日附)  
石門支局 小島 繁雄  
依願解職

依願解職(四月五日附各通)  
名古屋支社 安藤とみ子  
依願解職(四月七日附)  
編輯局 大野 梅子  
依願解職(四月十一日附)  
同社員 福田 正義  
依願解職(四月十二日附)  
大阪支社 木島 時子  
依願解職(四月十五日附)  
福岡支社 市原 梅喜  
勤務社員  
依願解職(四月十七日附)  
編輯局 山村しづ子  
依願解職(四月二十日附)  
編輯局 田島 昌夫  
依願解職(四月二十二日附)  
同 高崎 正巳  
蚌埠支局 金島 顯泰  
松江支局 藤原 美根  
依願解職  
海外局勤務社員 一條 重一  
依願解職(四月三日附各通)  
華中總局 龜井種次郎  
解職(三月十一日附)  
大阪支社 香川 邦彦  
戰死(二月二十日)  
總務局 石井 孝  
死亡(三月二十八日)  
神戸支局勤務 高田 愛子  
務准社員 死亡(四月十日)

依願解職(三月三十日附各通)  
編輯局 中川 清  
同 和男  
柳田 莊藏  
丹羽 正  
松岡 幸吉  
新堀 利子  
南 友子  
編輯局 佐藤 正雄  
同 持田 和子  
下關支局 土田 保  
依願解職(三月三十一日附各通)  
金澤支局 加賀 壽子  
依願解職(四月二日附)  
神戸支局勤務社員 細田 要  
釜山支局勤務 長井美代子  
務准社員

依願解職(四月五日附各通)  
名古屋支社 安藤とみ子  
依願解職(四月七日附)  
編輯局 大野 梅子  
依願解職(四月十一日附)  
同社員 福田 正義  
依願解職(四月十二日附)  
大阪支社 木島 時子  
依願解職(四月十五日附)  
福岡支社 市原 梅喜  
勤務社員  
依願解職(四月十七日附)  
編輯局 山村しづ子  
依願解職(四月二十日附)  
編輯局 田島 昌夫  
依願解職(四月二十二日附)  
同 高崎 正巳  
蚌埠支局 金島 顯泰  
松江支局 藤原 美根  
依願解職  
海外局勤務社員 一條 重一  
依願解職(四月三日附各通)  
華中總局 龜井種次郎  
解職(三月十一日附)  
大阪支社 香川 邦彦  
戰死(二月二十日)  
總務局 石井 孝  
死亡(三月二十八日)  
神戸支局勤務 高田 愛子  
務准社員 死亡(四月十日)

依願解職(三月三十日附各通)  
編輯局 中川 清  
同 和男  
柳田 莊藏  
丹羽 正  
松岡 幸吉  
新堀 利子  
南 友子  
編輯局 佐藤 正雄  
同 持田 和子  
下關支局 土田 保  
依願解職(三月三十一日附各通)  
金澤支局 加賀 壽子  
依願解職(四月二日附)  
神戸支局勤務社員 細田 要  
釜山支局勤務 長井美代子  
務准社員

依願解職(三月三十日附各通)  
編輯局 中川 清  
同 和男  
柳田 莊藏  
丹羽 正  
松岡 幸吉  
新堀 利子  
南 友子  
編輯局 佐藤 正雄  
同 持田 和子  
下關支局 土田 保  
依願解職(三月三十一日附各通)  
金澤支局 加賀 壽子  
依願解職(四月二日附)  
神戸支局勤務社員 細田 要  
釜山支局勤務 長井美代子  
務准社員

依願解職(三月三十日附各通)  
編輯局 中川 清  
同 和男  
柳田 莊藏  
丹羽 正  
松岡 幸吉  
新堀 利子  
南 友子  
編輯局 佐藤 正雄  
同 持田 和子  
下關支局 土田 保  
依願解職(三月三十一日附各通)  
金澤支局 加賀 壽子  
依願解職(四月二日附)  
神戸支局勤務社員 細田 要  
釜山支局勤務 長井美代子  
務准社員

依願解職(三月三十日附各通)  
編輯局 中川 清  
同 和男  
柳田 莊藏  
丹羽 正  
松岡 幸吉  
新堀 利子  
南 友子  
編輯局 佐藤 正雄  
同 持田 和子  
下關支局 土田 保  
依願解職(三月三十一日附各通)  
金澤支局 加賀 壽子  
依願解職(四月二日附)  
神戸支局勤務社員 細田 要  
釜山支局勤務 長井美代子  
務准社員

依願解職(三月三十日附各通)  
編輯局 中川 清  
同 和男  
柳田 莊藏  
丹羽 正  
松岡 幸吉  
新堀 利子  
南 友子  
編輯局 佐藤 正雄  
同 持田 和子  
下關支局 土田 保  
依願解職(三月三十一日附各通)  
金澤支局 加賀 壽子  
依願解職(四月二日附)  
神戸支局勤務社員 細田 要  
釜山支局勤務 長井美代子  
務准社員

依願解職(三月三十日附各通)  
編輯局 中川 清  
同 和男  
柳田 莊藏  
丹羽 正  
松岡 幸吉  
新堀 利子  
南 友子  
編輯局 佐藤 正雄  
同 持田 和子  
下關支局 土田 保  
依願解職(三月三十一日附各通)  
金澤支局 加賀 壽子  
依願解職(四月二日附)  
神戸支局勤務社員 細田 要  
釜山支局勤務 長井美代子  
務准社員

依願解職(三月三十日附各通)  
編輯局 中川 清  
同 和男  
柳田 莊藏  
丹羽 正  
松岡 幸吉  
新堀 利子  
南 友子  
編輯局 佐藤 正雄  
同 持田 和子  
下關支局 土田 保  
依願解職(三月三十一日附各通)  
金澤支局 加賀 壽子  
依願解職(四月二日附)  
神戸支局勤務社員 細田 要  
釜山支局勤務 長井美代子  
務准社員

依願解職(三月三十日附各通)  
編輯局 中川 清  
同 和男  
柳田 莊藏  
丹羽 正  
松岡 幸吉  
新堀 利子  
南 友子  
編輯局 佐藤 正雄  
同 持田 和子  
下關支局 土田 保  
依願解職(三月三十一日附各通)  
金澤支局 加賀 壽子  
依願解職(四月二日附)  
神戸支局勤務社員 細田 要  
釜山支局勤務 長井美代子  
務准社員

依願解職(三月三十日附各通)  
編輯局 中川 清  
同 和男  
柳田 莊藏  
丹羽 正  
松岡 幸吉  
新堀 利子  
南 友子  
編輯局 佐藤 正雄  
同 持田 和子  
下關支局 土田 保  
依願解職(三月三十一日附各通)  
金澤支局 加賀 壽子  
依願解職(四月二日附)  
神戸支局勤務社員 細田 要  
釜山支局勤務 長井美代子  
務准社員

依願解職(三月三十日附各通)  
編輯局 中川 清  
同 和男  
柳田 莊藏  
丹羽 正  
松岡 幸吉  
新堀 利子  
南 友子  
編輯局 佐藤 正雄  
同 持田 和子  
下關支局 土田 保  
依願解職(三月三十一日附各通)  
金澤支局 加賀 壽子  
依願解職(四月二日附)  
神戸支局勤務社員 細田 要  
釜山支局勤務 長井美代子  
務准社員

# 互助會報告

【三月分】

△結婚

守屋 文雄(總務局) 玉井 孝(編輯局)

小林 則雄(海外局) 佐藤 啓之(編輯局)

稻葉田美子(同) 岩崎 正雄(同)

片山 和衛(同) 川井 行雄(香港支局)

金海 昌福(濟南支局) 石川八郎治(京城支社)

米田 辰義(花蓮港支局) 姫野 豊吉(大分支局)

山田 正作(札幌支社) 山村外史光(臺北支社)

東村 正夫(大阪支社) △出生

川島 武夫(聯絡局) 坂井 義房(編輯局)

石井 卓朗(南方總社) 安藤 利男(編輯局)

千栗 愛雄(編輯局) 高宮 利彌(總務局)

五月女 章(海外局) 山田 憲吉(經濟局)

佐藤喜三郎(聯絡局) 伊藤 壽雄(編輯局)

李末 愛(京城支社) 日比生 登(華北總局)

鳥居 朗(同) 矢野 勝一(福岡支社)

市原 梅喜(同) 工藤 貞義(秋田支局)

松本 彌(札幌支社) 馬場繁治郎(小樽支局)

進藤余四男(函館支局) 今川 一雄(京都支局)

鶴澤 邦男(臺北支社) 織田 啓一(同)

堀尾 壽春(同) 末永房太郎(大阪支社)

河瀬 四郎(同) 宗澤萬壽夫(同)

山田 安二(名古屋支社) △應召・入營・應徵

北 雄士(編輯局) 谷 英克(經濟局)

足立 克己(同) 三輪 啓(同)

久保 定雄(同) 祓川 親眞(編輯局)

能關 彦二(海外局) 早瀬 敏德(聯絡局)

高橋 榮一(聯絡局) 服部 鈞(聯絡局)

松永 二郎(總務局) 伊藤 貞雄(聯絡局)

成田 安賢(編輯局) 鈴木 鐵男(聯絡局)

伊藤 巖(名古屋支社) 松永 富男(漢口支局)

福成 秋男(華北總局) 川畑 徹(同)

中野 嘉男(同) 田村 棧道(同)

赫 駒夫(同) 淺井 春俊(福井支局)

新保 正三(新潟支局) 久保 信夫(德島支局)

吉川 金一(仙臺支局) 水本 一男(京都支局)

△見舞

大崎 博行(總務局) 病氣

山本 守(マニラ支社) 長男同

深谷 とく(聯絡局) 病氣

綾野 政治(總務局) 同

大久保サキ(編輯局) 同

京藤 讓治(海外局) 同

小林 サリ(編輯局) 同

長尾庸四郎(海外局) 夫人同

高木 凱人(編輯局) 病氣

次男 推橋 愛子(同) 同

長女 久保 友雄(同) 同

三男 大崎 博行(總務局) 病氣

二男 長濱 純一(海外局) 同

三男 大富 信二(聯絡局) 夫人同

同 水野 正一(海外局) 病氣

同 久原 一馬(門司支局) 同

同 杉山俊次郎(華北總局) 同

同 小澤 茂(同) 同

同 酒井 忠俊(同) 夫人同

同 三納 信子(金澤支局) 病氣

同 中尾日出輝(熊本支局) 同

同 水上 勇(小倉支局) 同

同 清澤 止次(門司支局) 長男同

同 塚本 數男(同) 病氣

同 山下 義夫(高松支局) 同

同 刀根 治平(福岡支社) 長男同

同 佐藤 好也(仙臺支局) 病氣

同 山本 勇司(盛岡支局) 盜難

同 長尾 義男(大阪支社) 病氣

同 魚住マヨ(同) 同

同 吾村 勉(同) 同

同 渡邊政之助(同) 同

同 岸 芳一(同) 同

同 菱田 和男(聯絡局) 同

同 赤星 勝夫(大阪支社) 二女同

同 山村 正之(同) 火災

同 村田 明生(名古屋支社) 病氣

同 伊藤 勘太(同) 同

同 水谷安左衛門(同) 同

同 大林 秀(海外局) 同

同 安達 三郎(聯絡局) 夫人同

△弔慰

高島 金作(聯絡局) 死亡

原邊 榮造(海外局) 父同

原邊 榮造(同) 祖母同

後藤 丙午(編輯局) 夫人同

宮内くに子(昭南支社) 死亡

中村 實(編輯局) 母同

新藤利太郎(聯絡局) 死亡

山本 滿夫(編輯局) 夫人同

都築 三良(總務局) 實父同

小川 三郎(編輯局) 實父同

白石 亮(門司支局) 父同

有村 春男(マカッサ) 實父同

佐々木健兒(華北總局) 三女同

鳥越 弘(同) 死亡

手塚 秀雄(同) 同

東 清司(富山支局) 實兄同

宮崎 タキ(熊本支局) 實妹同

岡野 高芳(小倉支局) 祖父同

三宅 清(德島支局) 夫人同

西川 恒吉(福岡支社) 實父同

小原 惟義(同) 弟戰死

進 仁(同) 同

松本 彌(札幌支社) 三女死亡

諸岡 一男(大阪支社) 實弟同

西本 重信(同) 實兄同

藤田 宜敏(同) 實父同

豐田 治助(海軍報道班) 實母同

大橋 博(大阪支社) 夫人同

古川永次郎(名古屋支社) 實母同

高野 勇(同) 祖母同

高橋恒三郎(秋田支局) 實母同

△退社

車田 すみ(聯絡局)

内海 たか(同)

新田 蓮子(編輯局)

神 秀雄(同)

大塚八重子(經濟局)

伊東 悅郎(津支局)

高野 光輝(神戸支局)

岩邊 高雄(橋濱支局)

中村 敬一(神戸支局)

柳井 露子(同)

山路 啓次(同)

藤原登久子(大阪支社)

宗我部 勇(同)

木下 種子(同)

合計 一五六件  
金一〇、九八〇圓也

## 松本常務輕快

開病一ヶ月、消化器疾患療養に専念されつつあった松本常務理事は最近では病床に起き上られる程度に恢復された。血色も佳く、體重のとき發病前よりも寧ろ増加された由である。

住所 鎌倉市小町三二八番地  
(電話鎌倉六九五番)

# 本社産報の農事鍊成

## 多摩農場で食糧増産に挺身

本社産報國會各大隊、青年隊女子隊は四月十六日古野社長の陣頭指揮下に多摩農場に出動、總坪數一萬三千坪中未開墾地八千坪を緑化し、食糧増産の國策に順應すべく境界整備の石運び作業を行つた。しかし四月二十日より農事日々鍊成を實施し、各大隊より隊員多數を派し、先づカボチャ種子播付けのため穴掘り、客土運搬、施肥の諸作業を實施してゐる。

引續き既開墾隣接農場と同様、諸野菜、穀類その他食糧農産物増産を着々實施する計畫であるが、一日を農場作業に挺身する同盟職員、敢闘こそ、尊くも雄々しき「戦ふ姿」である。

五月七日の日曜日には青年總隊を主に本隊員も参加し、河畔の爽



快な初夏の日ざしの下、砂利や石ころを踏みしめ、雜草、葦の枯莖を踏みわけて作業に熱汗を流したが、全く勤勞奉仕として多摩出動の順番を俟たず出動した老境近き社員もあり、またこの日古野社長自ら鋏をとり、シャベルを揮つたのであつた。寫眞を御覽せよ、誰か感奮せざる。(寫眞上は五月七日多摩農場において作業中の古野社長以下職員、中圖は四月十六日の境界制定作業に熱中する女子隊産報本隊の各一部)

### 宮城前遙拜

大詔奉戴日に行進

同郷郷軍分會および産報各隊は五月八日大詔奉戴日朝八時、本社

### 臺北支社の職員訓練

應酬常務寄臺す

前公園廣場に集合、分會は武裝整々しく、産報本隊、同青年總隊、同女子總隊はいづれも決戦服に身を引緊めて行進を開始、二重橋御前にいたり遙拜新念を捧げ再び日比谷公園に歸還、社長の閣兵、閣團ならびに訓示を受けて解散、直ちにそれぞれの職場についた。

この日特に折柄來朝中の隣邦國民政府宣傳部長兼中央電訊社長郭秀峯、同社副社長胡瀾洲の兩氏は意義あるこの舉に参加し、古野社長と歩を揃へて行進を行つたことは特記すべきである。(第一面所報参照、寫眞は遙拜了へて幸門に向ふ分會行進の一部と古野社長(左)、郭社長(次)、胡副社長(次)、大平編輯局長(右)、後続行進は産報本隊)

常夏の臺灣も北部は五月中旬まで雨期である。どしや降りの日がづき割合に涼しいが、間もなく来る暑さが思ひやられる。しかし支社全員は兵站基地から作戦基地へと飛躍した要塞化臺灣防衛の一翼に参加した氣持ちで社務に精勵する傍ら訓練に、野菜作り(臺灣は夏になると野菜不足を來す)に精進しながら郷軍の訓練に、徴兵制實施に伴ふ市主催の青少年訓練にまで進んで参加してゐる。

四月中旬南方巡視に向はれる途次寄臺された應酬常務理事も去る四月十八日郷軍、青年隊の訓練を査閲されたところ大に満足の意を表されたのであつた。即ち毎朝八時か



### 大達都長官本社を參觀

東京都長官大達茂雄氏は松村次長、水防防衛、福本經濟兩局長、相馬參事官、吉武人事、時田企畫兩課長等を隨へ去る四月二十七日日本社を訪れて社内各部署を巡覽された。しかしして執務活動中の編輯室その他に歩を運び各部長の説明を聞いたが、最近本社技術研究所が完成した文字電送機の説明には特に耳を傾け、自署電送の實驗を試みるなど熱心に視察された。かくて長官は巡覽を了つて同盟食堂の辨當を本社幹部と會食、非常時における報道諸對策等につき重要な打合せを遂げ、午後二時辭去された。

(上の寫眞は外信部デスク前において長谷川部長の説明を聴く長官一行中央俯けるが大達長官、その後古野社長)